

---

# 乱世に白菊を手向く

切香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乱世に白菊を手向く

### 【Nコード】

N3918D

### 【作者名】

切香

### 【あらすじ】

「お前は、何もわかってない」日番谷は、対峙する市丸にそう告げた。乱菊が見守る中、白熱する2人の戦いの行方は？シリーズ短編。

死をはらんだ静寂。

ボクはその場を立ち去る寸前、ふと足を止めた。

かつて幼馴染であり、手をつないで笑いあっていたふたりが、今は冷たい石の上でぴくりともせず横たわってた。

互いの命が、ゆっくりと石の上を流れ落ちる音を、瀕死の状態で聞いているんやろか。

この光景を見るであろう、古い馴染みの女をふと思い出した。

あの女は、泣かんやろう。

ちよっとくらい泣いても、すぐに振り切れるはずや。

それでこそボクの見込んだ、イイ女や。

なぜならお前もあの時、ボクと一緒に、あの平和な景色の中に今の場面を見てたはずやから。

\*\*\*\*\*

「市丸副隊長、松本副隊長、紹介します。

この子があたしの大事な幼馴染の日番谷冬獅郎くんです」

小さな頭を小突くようにして頭を下げさせた雛森ちゃんは、エヘへとボクに向かって照れ笑いをしてみせた。

・・・大事な幼馴染、なあ・・・

ボクは今日の晩メシなんやろ、って考えながら上の空で雛森ちゃんの言葉を反芻した。

あかんなあ、雛森ちゃん。

ボクみたいな胡散臭い人間の前で、そう簡単に誰が大事か言ったらあかん。

「痛えな。誰だよ、こいつら」

愛想も素っ気もない悪態について、雛森ちゃんの軟い手を払いのけたのは、日番谷って呼ばれた子供。

身長は雛森ちゃんの胸の辺りしかないが、銀色の髪が人目を引く子やと思った。

荒っぽい言動とは裏腹に、顔立ちはキレイなもんや。

金持ちのボンボンっていうよりかは、血筋のええとこのお子さんって感じの、種のよさそうな空気を持ってた。

「失礼なこと言わないの！この人たちは、五番隊と十番隊の副隊長さんだよ！」

「アタシは松本乱菊。そのひょろい男が市丸ギンよ」

乱菊の声に、やっとその子は蒼碧の瞳をボくらに向けた。

ふーん、ともつかない音を鼻からもらして、ボくら2人をざっと一瞥する。

いい目エしとるな。

そういいたくなるくらい、その瞳は澄んでた。

ただボクが気にいったんは、目っていうよりもその傲岸さや。

自分より遥かに年上で、護廷十三隊の副隊長ともあろう者を、思いっきり品定めのみで見よった。

出世を望んどる、ギラギラした感じはどこにもない。

ボクがイメージしたんは、老成した王が部下を見るときの視線。

ボクの貧困な想像力じゃそんなもんやけど、ボロい着物の子供に感じる雰囲気としては、異様な感じだけは確かにした。

「じゃあ、あたしはこれで・・・シロちゃん行くよ?」

鏑競り合うように見交わしてた、日番谷はんの瞳の光が、ふっと薄れた。

不満げに雛森ちゃんを見上げるその瞳に、もう傲岸さはない。

ふたりして言い争いながら帰っていく二つの背中を、ボクと乱菊はなんとなしに見守つとった。

夕暮れの中黒いシルエットに見える二人の背中が、日番谷はんが小突いたとき重なつて。

離れたとき、ふたりは手をつないどつた。

雛森ちゃんが笑う澄んだ声が響いた。

絶対的な信頼。

そんな言葉がボクの脳裏をよぎつた。

その時浮かべた乱菊の表情は、俺は好きやつたな。

悲しそうな笑顔を浮かべとつた。

ボクが三番隊隊長になり、五番隊副隊長に雛森ちゃんが抜擢されてからは、藍染隊長に会いに行くついでに雛森ちゃんに声をかけることが増えた。

逆に、徐々にボクから距離をとろうとし始めた雛森ちゃんに声をかけ続けたんは・・・要するに、ボクがひねくれモノやったからやな。

雛森桃とボクは、その交わらなさでいえば水と油よりもヒドかった。藍染隊長が雛森ちゃんを、自分がいないと生きていけないくらいに「洗脳」するつて言ったときは、さすがに無理やと思つただけど。本当にあの子はそうなつた。

「憧れは理解とはもつとも遠い感情だよ」そう藍染隊長はその理由を端的に言つてたけど。

藍染隊長は、カケラも雛森ちゃんに感情をよせてへん。

雛森ちゃんは藍染隊長のためなら、命を投げ出してもいいと思うてる。

その関係は皮肉やけど、ボクにとってみたら当然なようにも思えた。

ただ、信じられなかった。

ヒトがヒトを裏切るなんて、確かに理想じゃあつたらあかんことみたいと言われとるけど、日常にはどこにだって転がつとるやろ。

どんなに氣いつけて歩いてても、石ころにはひっかかるもんや。

それなのに、裏切られたら生きてけへんなんて状態が、何でありえるんやろな。

同じ流魂街に生まれながら、どんな教科書どおりの道を歩いてきたんやろ。

100%崩れ去るって分かりきつとる、藍染隊長と雛森ちゃんの関係。

その筋書きももうできあがつとる。

悪趣味やなあ。

今でも心からそう思うわ。壊れる瞬間をニヤついて待つとった自分を。

せやから、藍染隊長が「死んだ」時の雛森ちゃんの狂乱振りは、まあそうなるやろなあ、ってシナリオ通りで。

初めこそおもろかったけど、見とるうちになんか飽きてきてなあ。ボクに刃を向けさせた。

ここで雛森ちゃんが死んでも、結末には影響が出んしなあ。

それに今さら親切もないけど、後から起きたことを考えたら、ソウル・ソサエティのためにも、このとき死んでたほうがよかったはず

や。

ボクが面白がって見とった戦闘に割って入ったんは日番谷はん。

「雛森に血イ流させたら、殺す」

やって。オトコマエやな。

あの時は傲岸でしかなかった瞳は、ちよつと色を変えとつた。

確かなものは確かにこの世にあると、確かに。思っている目やった。自分がそれを護れると。その上で、信じている目やった。

信じれんな。

そんな心がけの男が、それほどまでの力を手にすることができなんてな。

その分惜しいわ。

ボクはあとで藍染隊長にそう言った。

そんなボクに、藍染隊長はさらに悪趣味なことを言いよつた。

それじゃあ、その二人を殺し合わせればいいじゃないか。

僕なら一筆書くだけでそれができると。

さすがにそれは無理やと、思ったんや。

藍染隊長が、自筆で「日番谷冬獅郎が黒幕です」と書き遺す。

雛森ちゃんはあるさだまされるやろけど、日番谷はんは当然それが嘘やと分かる。

それなら、嘘を記した藍染隊長が黒やないかって、選択肢にいれるんが普通やろ。

ボクはまだええ子やったんか、藍染隊長と比べて読みが浅かったんか？

結局、ボクの目の前で、雛森ちゃんは日番谷はんに刀を向けた。

そして日番谷はんは、雛森ちゃんと殴って昏倒させた。

そんなことはどこにでもあるんやで。日番谷はん。  
それやのに尚あんたは、雛森ちゃんを信じようとしたな。  
雛森ちゃんが好いとる男が黒幕やっていう選択肢を、自ら捨てた理由はそれやろ。

確かなもの、なんてこの世にはない。

雛森ちゃんの心だけやない、何もかもが。

ボクらには土台なんてない。

空中を心もとなく漂ってるだけやってことに、目を背けたな。

そして・・・そんな二人を倒すんは全く大変やなかった。

藍染隊長への愛情とやらにかすんだ雛森ちゃんと、雛森ちゃんへの好意に揺らいだ日番谷はん。

隊長と副隊長の実力以下に、あっさりと勝負はついた。

ボクは立ち去り際、倒れた日番谷はんの開いたままの目をちらりと盗み見た。

その目は灰色に濁り、もう何も写してへんかった。

一番初めに、ボクを見た日番谷はんの瞳を思い出した。

ずっと、あれやったら良かったんや。

最後に俺の首に斬魂刀を突きつけた乱菊を、俺はキレイやと思った。  
キツイ目エしとったなあ。

お前は、幼馴染が自分を裏切ったことを認められなかった、日番谷はんとは違う。

事実を静かに受け止めた上で、ボクを許せへんって決めて、そしてここに来たんやろ。

こうするために。



泣きもせず悲しそうな表情も向けず、  
向けたのは一振りの刀。

ああ、お前はイイ女や。

誰にも頼らん、一人で生きてきた女やってことを、俺は知っとる。  
ボクがおらんようになって、お前は笑って、飯食って酒飲んで、  
寸分変わらんと生きていくんやろ。

でも、その風景の中に、ボクはおらんようになる。

ボクがぽつりと呟いた一言に、乱菊はますます爛々と輝く瞳をよこした。

そうやるな。ニセモノの取ってつけたような言葉に聞こえたんやろ。  
御免な。

\*\*\*\*\*

「あたしが好きなのはね・・・そう、アンタとは真逆な男よ」

「はあ？言うにことかいて、逆かあ？」

ボクは乱菊の杯に注ごうとした徳利を、傾けたまま止まって。そう  
言い返した。

猫みtainな蜂蜜色の目が、男を挑発する艶を浮かべとる。

「あつたり前でしょ。逆なら逆なほうがいいわ」

生意気なことをいいながら、乱菊は杯をボクのほうに突き出してみ  
せる。

場所は精霊廷のすみっこにある飲み屋。

周りにはイッパイやつてる死神仲間がわんさかおる。

使い込まれて艶の出た机に、オッパイを陳列するみたいに置いて、

肘をその前についた表情は桜色。  
そういえば聞こえはいいけどな、すでに何升飲んでるんや。  
ぼつと頬が染まる量ちゃうやろ。

「ほお。聞いたろやないか。どういのがボクの真逆なんか」  
「まず、まっとうな男」

アイツは正面からボクを見て言った。あかん、眼が据わってきとる。  
「男はくちやくちや喋るより黙ってるほうがいいの。  
で、たまにしゃべる言葉がとても優しいの。」

当たり前仲間とか、家族とか。恋人とかを大切にできる、義理堅い男。

正義とか、勇気とか。努力とか。そういうベツタベタな言葉が似合う男がいい」

「無いものねだりやな」  
ボクは思わずため息をついた。

「何よ」

つりあがった眼が、ますます猫みたいや。

ボクはニヤニヤ笑って乱菊を見返した。

「そつやなー。もしもそれでお前に、そんな男を見抜く目があったらよいんやけどな。」

お前の目は節穴やからな。そんな男とつきあってたこと、たった一度でもあるか？

いっつもぜんぜん違う、しょうもない男とばかりつきあつとるくせ。。。」

「くちやくちや喋るな」

ぺらぺらした紙に置いた文鎮のように。その一言はボクの言葉を押さえつける。

「眼で、わかるのよ。強い意志を持った瞳。」

あたしみたいに碌な生活してこなかった人間の心も、こじ開けてくれるような」

ボクには、それは助けてくれと聞こえた。  
酔いすぎや。ボクは軽くあしらったけど。

・・・当たり前の日常。

戦いになると、なんでこういうしょうもないことばかり思いだすんやらな。

千歳緑。

そうか。こいつの羽織の裏の色は、目の色から取ったんか。

こいつがまとった氷の細かい粒が、ダイヤモンドダストのように舞っている。

「だって。ずっと待ってるんだから」

乱菊。

あの时机につっぱして、くぐもった声で言ったあいつは今、ボクらの戦いを少し離れて見とる。

・・・

ボクと乱菊の視線が交錯する。

その表情からは、感情は読み取れん。

まるで銀幕の中の、自分の意思とは関係なく流れていくストーリーを、見守ってるみたいに。

日番谷はんは、ボクが視線を戻すまで、律儀にも待つとった。

ボクが眼を戻した瞬間、その口が呪をつむぐ。

「鎌鼬」

そういうと同時に、日番谷はんの上に向かって開いた手のひらから、風が眼にも止まらぬ速さで噴出す。

それはダイヤモンドダストを巻き込み、細かい針のように全身を突いた。

「ちっ」

ボクは顔の前に手をもってきて、風と氷をかわす。

霊力で体を護れば、わずらわしい程度のもんやが、眼に当たると厄介や。

そう思ったとき、ふっと頭の上に影が差す。

ガキン！

頭上から振り下ろされた日番谷はんの刀と、ボクが繰り出した刀が交錯して火花を散らす。

「白雷！」

日番谷はんが叫ぶのと、

「射殺せ、神鎗」

ボクが言いなれたフレーズを口にするのは、ほぼ同時。

まばゆいばかりの閃光がその地を覆い、ボクらは弾かれるように離れた。

ボクの腕は火傷と凍傷でチリリと痛み、日番谷はんは頬を流れる血を手の中であぐった。

このまま隊長格どうしが戦って、少しずつ消耗するんは厄介や。

どちらが勝ったとしても、傷だらけでここから無事に帰れんのやつたら、負けた人と同じや。

「ボクは飽きっぽいんや。そろそろ決着つけんか。乱菊も見てくれるしな」

ボクがへらへらと口から流した言葉に、日番谷はんがその蒼碧の目をこちらに向ける。

「・・・なぜお前は笑ってる？」

ボクは意図的に、笑みを深くした。

笑うとただでさえ細い眼がますます細くなる。

眼、なんて、むやみに人にのぞかせるもんやない。

「乱菊を気にしてるんか？アイツは強い女や。

ボクが死のうとアンタが死のうと、あの女は泣きも変わりもせん」

「強い人間なんていない」

それに対する日番谷はんの返事は簡単やった。

「あんたが乱菊を語るんか？」

「お前は、何もわかってない」

「ほお。ボクは何をわかってないんや？」

ああ、この眼や。ボクを射抜くようなこの眼。

ボクみたいに、何もかもどうでもいい人間には、決してできん眼をしてる。

顔に張りつけた微笑は、気づけば滑り落ちていた。

「松本は泣いてる。お前はそんなことも見えてねえのか」

なにを言っとなる。

乱菊がボクの前で、涙を流したことは一度もない。

今だって、平然と・・・

ボクは日番谷はんの大きな瞳を見返した。

そのとき、ボクの後ろにいた乱菊の姿が、

その瞳に小さく、小さく写っているのが見えた、ような気がした。

もちろん、こんなのは幻覚や。

でも、

まっすぐボクらのほうを見ながら、

・・・泣いてる、のか。

それが見えたのは一瞬。

日番谷はんの刀が光を帯びた。

「・・・正解」

声とともに、刀から冷気がほとばしった。

ボクも中は無意識に刀を開放する。

日番谷はんは刀を開放するなり、電光石火の勢いで、ボクの懷に飛び込んだ。

互いの刀が至近距離でぶつかり、ボクも思わず歯を食いしばる。

「ちっ！」

ボクの力が一瞬上回った、そう思ったとき、ボクは膝で日番谷はんの手首を蹴り上げた。

物理的な攻撃は意識になかったか、日番谷はんの刀が手から離れる。

勝った。

そう思ったとき、ボクと日番谷はんの瞳が至近距離であった。

恐ろしく澄んだ瞳や。

この期に及んで怖気つかず、それでもまだ、傲岸な眼をしてる。

初めて会ったときと同じように。

次の瞬間、日番谷はんはさらに一步踏み込んだ。

初めからこうするつもりやったんやないかって思っくらい、その動きは滑らかやった。

そして、神鎗の柄をボクとは逆に握りこむ。

奪う気か？

ボクは間髪いれず呪を唱えた。それに、日番谷はんの声も重なった。

『射殺せ、神鎗！』

声が響いた瞬間、日番谷はんのその瞳の中に、ボクはほんの刹那、乱菊を探した。

しかしその瞳が映したのは・・・滑稽なくらい目を見開いた、ボク自身の姿。

「な・・・にが」

何が起こしたんか、わからなかった。

とにかく腹がしびれる。膝の力が抜ける。生温かいものが、ボクの首元に飛んだ。

見下ろして、ボクは事態を眼にする。

「神鎗」の柄尻が破れ、そこから真新しく光る刀身が、突き出した。った。

根元くらいしか見えん。

それはボクの腹から背中に通っていたからや。

ボクの声で伸びて、日番谷はんを貫くはずだった刀は、伸びずに日番谷はんの体の前で止まっていた。

「・・・斬魂刀にも、心がある」

膝を着いたボクの前で、日番谷はんが言った。

「死神の、斬魂刀の役割は魂を護ること。

それに反して魂を奪い続けるお前を、神鎗は許せなかったんだ。お前はやっぱり・・・何も分かってない」

そこまで言って、日番谷はんは言葉をとぎらせた。

だから・・・神鎗はボクやなくて日番谷はんの解号に反応して、ボクを貫いたんか？

死神にとって親よりも子より近い、分身みたいな存在の斬魂刀に裏切られて死ぬなんて。

ボクらしいわ。

ボクは跪いたままでもいたらしい。

視界がさあっと夕闇のような闇に閉ざされていく。  
二度と明けない暗闇に飲み込まれていく。

「ギン！」

ボクの肩を揺さぶって、叫ぶ女の声。

ああ。

やっぱりお前は、夕闇のなかで見てもイイ女や。

その小麦色の髪をなびかせ、眉間に皺を寄せて。 大声で叫んどる。  
何を言ってるんか聞こえへん。

ボクは、目を見開いた。

乱菊の表情を見ようとす。

日番谷はんの声が、耳によみがえる。

お前は、何もわかってない。

乱菊。

やっぱり・・・そうなんか。

少したけボクは笑ったようや。

そして、

市丸ギンは絶命した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3918d/>

---

乱世に白菊を手向く

2010年10月9日20時36分発行